

「これからの日本ラグビー」

Future of Japanese rugby

1k07B033-9 榎本 光祐

指導教員 主査

間野義之先生 副査

寒川恒夫先生

【第1章 緒言】

ラグビーの起源については諸説あるが、正確にはわかっていない。1830年代に入り現代のラグビーが作られた。日本にラグビーが伝わったのは19世紀末から20世紀初頭にイギリスから持ち込まれた。世界のラグビーの総人口は約300万人強である。世界ランキング上位10位の国の合計は約260万人であり、日本は世界で約10位の数で約12万人がいるが、総人口におけるラグビー人口は低く、少子化や時代の変化によるラグビー人口の減少が進んでいる。ラグビーには15人制と7人制があり、それぞれ男女ともに行われている。2016年のリオオリンピックから7人制ラグビーが導入されることが決まり、さらに2019年には日本でラグビーワールドカップが行われることが決定された。これから男女ともにラグビーの普及と強化が課題である。

【第2章 アマチュアイズム】

日本ラグビーは1世紀にわたって厳格にアマチュア精神が受け継がれてきた。2003年度から日本でも「ジャパンラグビートップリーグ」が始まり、初めてのリーグが設立された。野球やサッカーはプロとしての団体がそれぞれ日本野球機構、日本プロサッカーリーグが存在し、プロとして活動されるスポーツにはゴルフ・プロレス・ボクシング・バスケットボール・テニス・競馬・競輪・競艇・オートレース・大相撲などなど数多くプロ団体が存在するが、ラグビーではプロとアマチュアが混同している異質なプロリーグである。年俸もその他のプロスポーツに比べると少なく、ラグビーマーケット自体が構築されていない。ラグビーを統括・管理を行う機関も他競技に比べ存在感は薄く、マネジメントでも、アマチュアの部分が多く残っている。スポーツのアマチュアイズムについての源泉を近代のヨーロッパから検証し、近代オリンピックが成立した20世紀初頭に定められた「プロとアマチュア」から見る。一方で、プ

ロ野球とプロサッカー（Jリーグ）を例にプロ化された他スポーツについて、その全体から見たプロの存在、さらに契約の概要など見ることによってラグビーとの違いを示す。

【第3章 日本ラグビーとユース世代の育成】

日本ラグビーは大学ラグビーを中心にして発展してきた。その大学ラグビーについて調べる。「西低東高」と言われる大学ラグビーの関東の大学ラグビーから全国の大学ラグビーを見る。2019年のラグビーワールドカップ日本開催に向けて、これからの日本ラグビーの強化に向けての実情について考える。今までの世代代表は世代間が詰まっており、効率的な指導が出来ず、今年度から日本ラグビーフットボール協会が「戦略計画」を定め、これからどのような普及を行うのか。どのように一貫指導体制を作るかを、日本協会が定めた戦略を具体的にみる。またラグビー先進国である、小学校低学年から代表が整備されており、ブルース（ウェールズ）やカンタベリー（ニュージーランド）のラグビー協会が導入している一貫指導体制とヒエラルキーを紹介し、今後日本で取り組もうとするモデルケースについて、今までの20歳前後で組織される各世代代表から2年前に再編成されたU20のシステムや成績に触れる。

【第4章 まとめ】

これからの日本ラグビーの普及・強化のための具体的な戦略について提議する。特にニュージーランドのカンタベリー協会で行われている活動から、日本でも導入可能な活動について考える。また100年の間、アマチュアを受け継いできた日本ラグビー界にプロラグビーの創設についても積極的に考える。今後10年間で何が出来るかを考え、2019年大会で日本が計画通りにベスト8に残るために必要なことを考える。